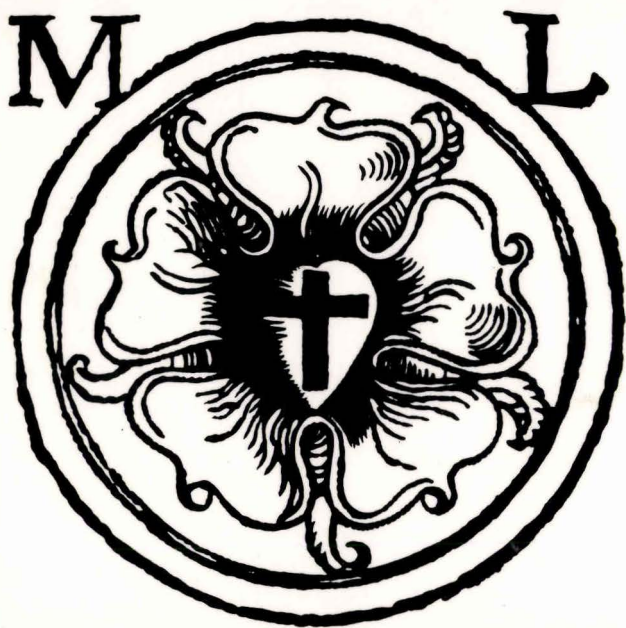


ルターの信仰に 生きる

●ルーテル教会 その教えの特徴

日本ルーテル神学大学 ルター研究所編



聖文舎

ルターーの信仰に生きる

——ルーテル教会 其の教えの特徴

日本ルーテル神学大学 ルター研究所

表紙——ルターの紋章

すでに1516年にマルティン・ルターは、自分の家紋から、自分の神学をあらわす「ルターのバラ」の紋章を考え出していました。ある手紙の中でルターはこう書いています。

「第一は十字架です。それは自然の色をした心臓の中に黒く描かれています。これによって私は自ら、十字架につけられたかたを信じる信仰が私たちを救うことを思い起こしたいのです。なぜなら、義人は信仰によって、それも十字架につけられたかたを信じる信仰によって生きるのです。この心臓は白いバラのまんなかにあります。信仰は喜びと慰めと平和とを与えることを示すためです。だからバラは赤くなく、白なのです。白は霊と天使の色だからです。このバラは空色の地の中にあります。霊と信仰における喜びは、きたるべき天の喜びの始まりです。その地のまわりに金色の輪があります。それは救いが天では永遠に続き、終わりがなく、あらゆる喜びや宝にまさってすばらしいものであることを示します。金は最高の、高貴で、高価な金属だからです」。



目次

一、	聖書のみ・恵みのみ・信仰のみ——ルターとルーテル教会	五
二、	働く神と応える人——応答としての信仰告白	八
三、	神を畏れ、愛し、信頼する——三位一体の神	一二
四、	キリストのゆえに、無代価で——恵みのみ	一七
五、	十字架と復活の主——キリストのみ	二一
六、	キリストを証しする唯一の正典——聖書のみ	二五
七、	キリストの声を聞く——神の言葉としての説教	二九
八、	キリストに触れ、キリストを味わう——神の言葉としての sacrament	三三
九、	神の慈愛と峻厳とを見よ——律法と福音	三七
一〇、	キリストと聖徒の交わり——教会のしるし、見える教会と見えない教会	四二
一一、	神の奉仕としての礼拝——教会の働き(1)	四五
一二、	伝道し、奉仕し、教育する——教会の働き(2)	四八

一三、	牧師として、そして信徒として神に仕える	——万人祭司	五二
一四、	信仰は神の働き	——信仰のみ（信仰義認）	五七
一五、	恵みの神の前での人間	——義人にして同時に罪人	六一
一六、	自由ゆえの愛、愛ゆえの自由	——キリスト者の自由	六五
一七、	信仰の内と外、内の外、内から外へ	——祈り	六九
一八、	信仰の果実としての行い	——善きわざ	七三
一九、	信仰とこの世における責任	——社会倫理と二王国論	七八
二〇、	神のつくられたこの世の完成へ	——終末	八二
	付・日本のルーテル教会の百年の歩み		八六
	あとがき		八九

一、聖書のみ・恵みのみ・信仰のみ

——ルターとルーテル教会

ルーテル教会が、宗教改革者マルティン・ルターから始まっていることは、みなさんよくご存じでしょう。ルターは自分の名のついた教会を建てようとしたのではなく、一六世紀の世界のなかで、教会がキリストの教会として生きなければならぬことを訴えつづけ、呼び掛けつづけたのです。しかし、ルターに反対する人々は次第に「ルターの仲間、やから」という意味で、「ルター派」と呼び始め、それが「ルーテル教会」という教会の名にまでなつてしまつたのでした。

ルターがそのように訴え、呼び掛けることになつていく様子を見てみますと、現代の世界、また、日本にあつて信仰に生きていく私たちの信仰の姿勢の基本を示されるような気がします。その元になつて居るのは、ルターが聖書と真剣に、必死に取り組んだことです。神のことばの意味するところを、人間の知恵によつてではなく、神のみこころに適つてとらえ

ようという思いからでした。聖書を、「神が私たち罪人にむかつて恵みをもって働き掛けてくださる」という角度で徹底的に読むようになったのです。このように聖書の中心をとらえたら、次に彼はそれを人々と分かち合おうとしました。再発見した福音を伝えずにはおれなかったのです。大学の聖書講義でこれを学生たちに伝えました。教会で説教によつてこれを民衆に伝えようとしたのです。それから彼は、その福音に立つて、当時の教会を考え、民衆の信仰を心に留めて、教会や神学者への問い掛けにまでしました。有名な「九五箇条」はそういうものです。それに対して起こってきた賛成、反対の声や対応に依じて、彼は丹念に説明したり、あるいは激しく論争したりしたのです。もっとよく神のみこころを知りたい、そのためだけにだれからでも学びたいという気持ちと、福音をめぐるは、譲れないものは譲れないという真剣な思いとが、彼にはありました。信仰は神学論議ではありませんから、彼はこれを熱心に教え、さらにこの福音に立つて、教会を建設していこうとして、積極的に働くのです。

こうして、彼と、その宗教改革運動との基本的なありかたが、いわゆる「宗教改革の三大原理」としてまとめられ、掲げられるようになったのです。「聖書のみ」「恵みのみ」「信仰のみ」の三つです。キリスト教信仰の源、根拠は、聖書のみであることの確認です。また、

信仰的実践です。また、私たち罪人の救いは、ただもうイエス・キリストにおける神の恵みの働きのみによることに徹していこうという姿勢です。この恵みを受け、これに応えるのはただ、信仰のみによるという深い信頼です。「三大原理」などと言って、生き生きしたいのちを失って、単なる知識のお題目にしてしまつては、台なしです。神の生きた働きがこの私に及び、私において働き、私をとおして隣人に向かい、世界のなかで働きつづけていく、その働きのただなかに私も身を置いて、動かされて行きたいものです。ルターはキリスト者であることを、「キリスト者となる」こととして強調しました。日々新しくキリスト者となつていく、信仰の生涯の歩みを、今この私が歩みつづける、これに徹することこそが、ルーテル教会としても、そのメンバーのひとりである私としても大切なことであり、これこそ宗教改革の信仰に今生きることにほかなりません。このようにして、私たちは世界のキリスト教に、いや、世界全体に働き掛け、貢献もしていけるでしょう。

一、働く神と応える人

——応答としての信仰告白

ルーテル教会の新しい式文の「信仰告白」には、今まで使い慣れてきた文語文と並んで、『ルーテル教会信条集』（一致信条書）に収められている口語文の「ニケア信条」と「使徒信条」が載せられています。それが、例えば「使徒信条」では、「天地の造り主、全能の父である神を 私は信じます」という言い方になつて、ことに気付いたり、不思議に思つたりしたことはありませんか。「我は天地の造り主、父なる全能の神を信ず」という言い方と、順序が違うからです。

こうなるのには、ふだん礼拝で告白するとき、「我は天地の造り主」と切つて唱えるのが普通ですが、私が天地の造り主であるかのようにも聞こえて変だということもあつたのですが、実はもっと大事な点に注目したから、このようにしたのです。

私たちの信仰は、神中心です。神がおられる、神が私たちの神であられる、私たちの神と

して私たちに働き、かかわってください、このことが私たちの信仰にとって、何よりもまず決定的なのです。そのような神がおられるからこそ、私たちは一人ひとりでも、みんなでも、その神を信じると告白できるのです。欧米の言語はともかく、日本語はそのような語順を許すのですから、今回はあえてこのような訳を試してみました。

キリストの教会として、ルーテル教会は信仰告白の教会であると自ら考えており、他の教派からもそう理解されています。これは大事なことですが、その時には、その信仰告白の前に、まずもって神がおられること、その信仰告白においても神がすべてであることを、はっきり確認する必要があります。ルターの「信仰のみ」と親鸞おんらんの「唯信」との共通点を指摘する研究もあり、事実それだけ見れば、そう言えると思いますが、決定的な違いは、その信仰の前に、それに先立って「神」がおられるかどうかだと思えます。「恵みのみ」の神のリアリティの問題なのです。

このように、私たちは恵みの神への応答として、信仰を告白します。ひとつには、今私たちの信仰の生活のすべてをもって、思いと言葉と行いのすべてをもって、と言うべきでしょう。礼拝での信仰告白はそのような全生活の凝縮でなければなりません。祈りも、証しも、社会の中での動きも、信仰告白の脈絡にあるのに外ならないのです。

その上、ルーテル教会は信条の教会と言われます。初代教会や宗教改革の教会が、緊迫した状況の中で、身を賭して告白した信仰を、生きた伝統として持ち、それとの絶えざるかわりの中で「告白する信条教会」なのです。

ルーテル教会が、初代教会以来の信仰告白のなかから、宗教改革の時代に自らの信仰告白として受け入れて、自分たちが使徒以来の正統信仰を継承していることを明らかにするものとして告白したのは、「使徒信条」「ニケア信条」「アタナシウス信条」の三つです。使徒信条はローマから始まって、西方の教会において、礼拝や洗礼などを背景にしていれば自然発生的な形で成立した信仰告白です。ニケア信条は、「キリストは神か」が問題になったとき、三二五年のニケア公会議で「キリストは神であつて、人である」として、三位一体の神告白が決定され、宣言され、三八一年のコンスタンティノポリス公会議で再確認された信仰告白です。アタナシウス信条は、この決定を敷衍して、おそらく歌の形でまとめた信仰告白です。いずれも、父と子と聖霊の、ただひとりの神を、歴史のなかで人間を救う働きをなさる神として告白しているものです。

宗教改革の時代には、さらにそれぞれ具体的なきつかけや目的、必要があつて成立した文書のなかから六つの文書が、ルーテル教会固有の信仰告白として認められるようになり、今

日に至っています。ルターが信仰の教育のためにまとめた、子の問いに対する親の信仰告白としての答えを基本的な形とする『小教理問答』や、ドイツの国会に教会の改革の呼び掛けも含めて提出された『アウグスブルク信仰告白』（これには解説に当たる『弁証』があります）はぜひ読みたいものです。そのころは教師、牧師のために書かれたに違いない『大教理問答』や『シユマルカルデン条項』なども、宗教改革の信仰の気迫を伝えてくれます。宗教改革の時代の神学論争の決着をまとめた大部の『和協信条』もその告白的姿勢においては、今なおとりわけ強いインパクトを私たちに与えてくれます（『ルーテル教会信条集』七三八、九〇四頁）。

三、神を畏れ、愛し、信頼する

——三位一体の神（父・子・聖霊）

あの人も神さまを信じているのだから、ということが単純に私たちの判断の基準となることがあります。しかし、初代教会のキリスト者たちがローマ帝国で迫害された時の罪名のひとつは、キリスト者が「無神論者」だということでした。なるほど、ローマの人々が信じていた神々を彼らは信じなかったのです。ルターは『大教理問答』の中で、人がその心をつなぎ信頼をよせているもの、それがその人にとっての神であると言っています。もしその人が自分の生き方を、お金を基に考えているなら、お金がその人の神であるというのです。知恵であれ、才能であれ、学歴であれ、理性であれ、同じように神でありえます。いわばそのよくな人の生き方の中心に、聖書を通して「わたし」として語りかけられるおかたを据えていなくてはならないというのです。

しかも、「私たち」が据えたつもりでいても、実はこの相手である神さまのほうが私を捉

えていてくださったのだと、信仰は告白します。「主イエスこそは、選びとりし、宝なり」と讚美歌はうたっています（教会讚美歌三二二）。私たちの体験も、たぶんそうでしょう。しかし、その信仰の中で、逆に「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」という主の宣言に圧倒され、そのとおりですと告白せざるをえないのです（ヨハネ一五章一六）。それは私たちが第三者的に、人間が選ぶのではなくて神のほうに信仰者を選ばれるのならば私には責任はないとか、お選びをじっと待っていますとかいう場合ではありません。神と私の関係の中で、神が語られるべき台詞を、私が拝借して自分に言い聞かせたり、ほかの人の判定に使ったりするならば、それこそ自分を神にしているということになります。

神さまを自分の考えの中に取り込んで、人間化して考えたり、少しばかり扱いに注意しなくってはならない召使いのようになってしまうように、神を「畏れる」ことを、愛し信頼することに先立って、『小教理問答』は述べています。聖書が「聖」なる神を示しているのは、全く同じことを意味します。それは神が私たちから隔絶したおかたであることを言い現わしているのです。

しかし、神は人間から隔絶したおかたであるだけでなく、すべてのものと共に私たちを造

り、支えてくださるおかたです。単に信仰深い敬虔な心だけでなく、「からだとたましい、目と耳と両手両足、理性とすべての感覚」さらには「着物とはき物、食物と飲み物、家と屋敷、妻と子ども、田畑と家畜」など、からだと生活のために必要なすべてのものを与えてくださいます。田畑や家畜は縁遠くなつたし、家屋敷を自分のものにするなど及びもつかないなどと不満を言いたくなる現代ですが、私たちの生活の隅々まで神の恵みのもとにあるということが肝心なことです。神との関係の外にある部分はないのです。神が天地の造り主であるという時に、私たちはどうかすると、何億年も前の創造を考えたり、それはビッグ・バンによつて始まつたなどということを考えます。しかし、誰もその実際も、ことに存在するものの意味も知つてゐるわけではありません。自分自身の人生がどういう意味をもつてゐるか、私たちは思い惑います。聖書はそのような私たちに、神が私の造り主であり、愛していただくさるおかたであることを示します。それは確かにまことですと、私たちは自分に對する神の恵みのみわざを受け入れ、告白していかなくてはなりません。

残念なことに、人間はこのような実際的な持ち物や能力を、自分の努力とか運によつてかちとることができるようには思ひこんでいます。そして、かなわぬ時に神ならぬ神に依り頼んだり、自分で努力することが人間的なことだと思つたりしています。しかし、いつも自分の

人生を根底から支えてくださるおかたを見ていくことが必要なのです。主イエスは、神さまをも自分流に曲げて考えようとする人間に、本当の神のみ旨を現わし、もう一度本来の神関係に立ち帰らせるために来てくださいました。この「わたしを見た者は、父を見たのである」(ヨハネ一四章九)と言われるおかたによつて、私たちは神を知るのです。もちろんそれは、主と同時代に聖地に住んだ人たちしか、見る事ができなかったというのではありません。主イエスを見、そのみ声を聞き、力あるわざにあずかり、五つのパンによつて満腹することができた人々がみな主を信じたわけではありませんでした。主が復活されたのちに出会った弟子たちも、すぐに相手が主イエスだと分かつたわけでもありません。直接的な感覚は必ずしも信仰の相手としての主を捉えることができないのです。主ご自身が約束された聖霊が、私たちの心に働いてすべてのことを教えます。

主イエスの教えや行動は、しばしば弟子たちの意表をつくものでした。ことに、主イエスの十字架の死は弟子たちにとつても期待を裏切る大きな失望でしかなかったのですが、それが栄光の出来事であると悟らせられたのは、復活の主ご自身の証しと聖霊の導きであったと言ふことができます。神の働きは、私たちの目には逆にしか見えないことを通しても現わされます。ピリポのように、「父を示してくださいれば、満足します」(ヨハネ一四章八参照)と

言っても、直接に裸の神さまを見ることはできません。聖なる威厳の中においてになる神に直接出会うことに、人は耐えられないのです。しかし、神はご自身を主イエスにおいて、聖霊を通して示してくださいました。それでも、私たちは神全体を知るわけではありません。自分より大きいものを、私たちは理解出来ないからです。なお隠れておいでになるおかたとしての神ですが、しかし私たちは主イエスの出来事によって神のハートを与えられています。罪のゆるしと永遠のいのちの望みが、主の十字架と復活の出来事によって与えられているのです。

ですから私たちは、父・み子・聖霊として示されている神をひとりの神として、ひとりの神を父・み子・聖霊において礼拝します。神の存在を認めていけばよいというのでもなく、三位一体の神を認めることが必要なのだというだけでもなくて、み子イエスにおいて救いを成就してくださったおかたが、私の存在を含めたすべての造り主であり、支え主であることを信じて、告白し、また呼び求めるのです。

四、キリストのゆえに、無代価で

——恵みのみ

ルターは、「信仰とは、神に向かって躍動する感情である」と言いました。神を愛してやみがたく、心の中で神への思いが沸々と燃えたぎる。そのような思いが信仰だと言うのです。そのような私たちの思いに基礎を与えるものこそ、神が私たちに与えてくださる恵みなのです。恵みとは新約聖書においては、本来なにか「無償のもの」「贈られたもの」を意味しています。神は、とうてい赦すことのできない者を赦し、真実でない者を真実なものにしようと思えます。神はイエス・キリストにあつて、人間を「選び」に定め、自分自身をお捨てになりました。また、自ら聖であるように、人間を聖なるものにされようとなさり、自ら賢くあるように、人間を賢くされようとなさいます。何によつてでしょうか。言うまでもなく、イエス・キリストをとおし、十字架のあながいをとおし、愚かで、神にそむく者を受け入れようとなさる、その意志によつてです。このような神様の意志全体、みこころ全体、態

度、働きかけこそ、神の恵みの内容のすべてなのです。

このような恵みは、パウロが「義人はいない。ひとりもない。……すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている。善を行うものはいない、ひとりもない」（ローマ三章九、一二）と嘆いているように、決して私たちの力や良い行いによって与えられるのではなく、徹底的に私たちの外から来るもの、信仰によって私たちの内に与えられるものなのです。

一方、当時のカトリック教会は、洗礼において恵みが注がれ、助力の恩賜によって成長し、注入の恩賜によって人間の中に与えられている恵みが支えられ、善行へと駆り立てられると説きました。恵みを物として捕え、分割して与えることのできる物、人間の内にもある物として考えるのです。この恩賜観の相違は次の点に行き着きます。すなわち、カトリック的恩賜観においては、恩賜は良い行いや聖化の手段となり、また、教会も神に代わってこの恵みを管理していく機関となります。カトリック教会が「救いの機関」と言われるゆえんです。

しかし、ルターにとっては、この恵みは神の態度、神のみこころそのものであり、ただ信じることによってのみ与えられ、確かなものとされるのであり、悔い改めも、良い行いも、

一切はこのみこころへの信頼から流れ出てくるものとなるのです。いわば恵みこそ一切の根源とも言えるでしょう。それゆえ「恵みのみ」という言葉は、ルーテル教会と、そこに集う私たちを支える標語ともなるのです。したがって教会は、この恵みを求め、聞くことによつて日々新たなものとなつていきたいと願う人々の群れを意味することになります。しかしながら反面、ルター派はいつも「安価な恵み」「神への服従抜き恵み」を説くと批判されてきました。「恵みのみ」を言いながら、いつの間にか神様へのたぎるような熱い思いを忘れ、感謝も少なく、祈りも少なくなつてゐる。本来、神の恵みは人間の側に決断を促すものなのに、恵みに甘えて罪を犯し続け、その恵みに答えようと思ひではないかと。

親鸞もかつて専修念仏を教えたとき、彼の主張は結局弥陀の本願を頼り、それに甘えて何もしようとしない者を生むだけだと批判されました。その時、彼は「何もしないで救われるのだから、ますます弥陀の本願、恵みを誇ろう」と述べていったそうです。似たような現実がもし私たちの内にあるならば、もう一度ルターの言葉に立ち帰つていきたいと思ひます。信仰とは神の恵みに心揺り動かされ、神に向かつて躍動する感情です。感情とはさめやすいものです。絶えず礼拝をおし、み言葉や聖礼典をおして引き起こされ、思い起こされていかなければなりません。神の言葉に心から耳を傾けるところにこそ、決断が生まれてくる

のです。

「信仰のみが、業なしに救いを捕える。にもかかわらず、決して信仰はそれのみにとどまらない」（和協信条）。

「ただ従順なもののみが信じる。しかし、信仰は、敬けんな自己欺瞞、安価な恵みにならないために、従順の第一歩を歩まねばならない」（ボンヘッフアー）。

私たちの恵みは、安価どころか、それをとおりこして、全くの無代価なのです。大胆にこの恵み、神のみこころを信じ、信賴していききたいものです。

五、十字架と復活の主

——キリストのみ

数学者の岡潔氏が、次のように述べています。「宗教と理性とは世界が異なっている。人の悲しみがわかるというところに留まって活動しておれば理性の世界だが、人が悲しんでいるから自分も悲しいという道をどんどん先へ進むと宗教の世界に入ってしまう。キリストが愛と言っているのもこの事だと思う」と。つまり、悲しんでいる人がいるとき、どうすればこの人を慰められるのだろうか、こんなことをして本当に慰めることになるのだろうか。そう考えているうちは、それは理性の世界なのだ。しかしイエス様のように、ラザロが死んだとき、理由も聞かずに泣かれた。悲しんでいる人がいたとき、ただ、何も言わずにご自身も悲しまれた（ヨハネ一章三五）。それが宗教の世界であると岡氏は言っているのでしょう。

イエスの十字架は、まさにそのような悲しみの心の行き着く先の出来事なのでした。人を愛すべき時に傷つけ、助けるべき時に自分のことを考え、赦すべき時に報復を想い、

正義を立てるべき時に保身を計る。そんな人間を悲しみ、極みまで愛し、心を寄せ、ついには十字架の上で私たちの罪と愚かさを負い、神に赦しを乞うていかれた。それが十字架の出来事なのでした。当時、中世スコラ神学全盛の中で、あまりに理論的なキリスト理解に対し、ルターはキリストの出来事を救済論的に、あるいは、実存的に理解していきました。つまり、イエス・キリストを十字架の出来事から「救い主」として、しかも「この私を救ってくださいるおかた」として理解しようとしたのです。換言すれば、個々人が実存的に十字架につけられたキリストによって捕えられることを問題としていきました。そこから、かの有名な「キリストのみ」のスローガンが出てきたのです。

しかし、そのことは、主の「復活」の出来事を軽視することではありません。ルターの神学において「復活」は十字架の背後に退いていると指摘するむきもありますが、彼の神学は決してはじめから体系を意図したものではありません。当時の誤びゅうや論争点を軸に展開されていったのです。復活については「何ら論争も論議もない。ゆえにさらにこれを詳論する必要もない」と述べているように（『シユマルカルデン条項』）、教会の伝統的な復活理解に立つのです。

「復活」という出来事、これは本来、私たちが証明できる事柄ではありません。以前、

「死んだらどうなるのかよくわからないので、実際に死んで試してみる」と言つて、千葉県
の鋸山から飛び降りて死んでしまった高校生の記事が新聞に出ていました。彼が死を通して
何を見いだしたのか、それは彼にしかわからないことです。復活を否定する人は「死んだら
全てが終わり、後は焼かれて灰となり、やがて消えて何も無くなる」と考えます。しか
し、それも本人が体験したわけではなく、正確に「そう信じている」だけのことです。

一方、復活を信じる者は「死んで全てが終わりなのではない」と主張します。なぜでしょ
うか。神がご自身で「あなたはたとえ死んでも生きる」とおっしゃり、イエス様の復活の出
来事を通してそのように語っておられるからです。死んでなお、もう一つの世界、神のふと
ころに抱かれて生きるのです。いったい誰が、どのような権利を持つて「死んだら全てが終
わりだ」などと言いつけるのでしょうか。ハイデッカーが「死を通じてこそ人間が自由に営ん
で来た実存に決着がつけられる。生成を経てきたものが、いまや真に存在するものとなる。
かつて時間的であったものは、いまや時間的なものから解放されたものとなる」と述べてい
ることも、このことと関係します。人間は有限な時間的制約のもつて苦しんだり、悩んだ
り、喜んだり、愛したり、そのようなことを繰り返しながら絶えず何かに変容していきま
す。昨日の私と今日の私とは違います。それは絶えず中間的存在であり、死によって初め

て決着がつけられ、もはや時間に支配されない、中間的でない、真の存在が始まると見るのです。それを聖書は神のふところに抱かれて生きる表現します。どのような肉の衣をまとうのか。どのような姿でよみがえるのか。それはパウロも語るように、私たちにもわかりません。しかし、イエス様の復活の体には「十字架の傷跡」があつたことを想うとき、死に至るまで従順であつた、そのような姿をもつてよみがえらされていくのではないかと考えるのは、無益なことではありません。神はそのような従順さを、私たちのこの世の生において望んでおられるからです。

六、キリストを証しする唯一の正典

——聖書のみ

神は「わが高き櫓」（詩篇六二篇、文語訳）という力強い聖書の言葉が、口語訳は「われらの避け所」となり、さらに新共同訳では「砦の塔」になりました。櫓は城門の上や城の要所に建てられた高い所で、そこから攻めて来る敵に矢を放ったり、指揮をしたりした所です。しかし、砦は本城の外の近くにある出城にあたります。もちろんそれは昔の日本の表現ですから、詩篇の詩人がどのような実際の姿を考えていたのかわかりません。避け所は、その意味をとって訳したのでしょう。

宗教改革は、聖書をその教えの中心におきました。しかし「砦」か「櫓」かといった問題ではなくて、もっと大事な内容に関わる意味が正しく訳されているかどうか気になったり、新共同訳聖書に旧約の「続編」が付せられると、その範囲についても心配になるかもしれません。宗教改革のモットーのひとつである「聖書のみ」も、原典や訳にひどく違いが出る

と、不確かな思いがしなくてもありません。しかし、ルターは歴史的な検討もしましたし、続編にあたるものも、聖書とは区別して、訳しています。そして聖書が細かい点での検討はつねにされても、神のことばとしてキリストを証ししていることを信じ、教会が正典として伝えたものを受け止めてきました。

中世の教会では、聖書にはないさまざまな習慣や伝統が、聖書と並んで、教会でも大事にされてきました。あるいは、ほかの古典を大事にするのと同じように、聖書も大切な古典として扱う、というだけでしかなかった人文主義の考えもありました。さらには、聖書によらないで、直接自分の心に神の示しを受けようと望む人々もいたのです。そのようなさまざまな気風に対して、聖書こそが信仰の基準だと、宗教改革者たちは主張しました。ルターが聖書を強調したのは、それが救い主イエスを示す確かな書物であったからです。単に主イエスについての歴史的な知識を伝えるというのではありません。母マリヤのふところに抱かれた幼子イエスにも、「あなたのために」と差し出された十字架の贖罪者を重ねて見なくてはなりません。歴史の中においてになつた救い主キリストをもたらし、私たちをその主へと導くかどうか、それが聖書を聖書として読む鍵となります。

ルターをはじめ宗教改革者たちは、聖書の解釈についても、概して楽天的でした。こまか

い所で、違った解釈があつても、信仰をもって聖書を読めば、きつとその中心については、同じような理解をするにきまつていると考えています。彼らが同じ信仰を聖書から読み出すことが出来ると考えたのは、信仰の伝統に従つて読んでいたからです。自分自身に対することばとして聞くということは、決して自分勝手に理解したり、想像したりすることではありません。むしろ教会の信仰告白に示された神信仰、キリストによる救いの信仰をもって考へてゆかなくてはならないのです。

しかも、その信仰告白は、言葉の上で新しい言い方がなされていることはあつても、それぞれが聖書に基づいています。讚美歌や式文もそうです。聖書に基づくこれらの言葉が、十字架につけられ、復活されたイエス・キリストご自身に私たちを出会わせるのです。もともと新約聖書の基は、弟子たちが口頭で伝えた福音であつたのですから、それが口によつて宣べ伝えられた時に、つまり説教され、信仰者によつて伝えられる時にこそ、本当に生きたものとして受け止められるとルターは考えました。私たちはそのような意味で聖書を読み、また説教を受け取つているのでしようか。私たちの信仰が本当に聖書の示す主を信じる信仰となつているのでしようか。そこにこそ、本当の救いがあると告白出来るようになりたいのです。そのために、祈りと共に聖書を読んでいかななくてはなりません。ルターの「卓上語録」

には、「自分は毎年全聖書を注意深く、二度読み通した」という言葉があります。聖書をいのちを与える力強い木であるとするなら、多くの枝や葉に当たる一つひとつの言葉をゆすり、その意味を知っていこうとする願いが生まれてくるはずなのです。

七、キリストの声を聞く

——神の言葉としての説教

宗教改革とはまず第一に、説教運動であつたと言われています。ですからルーテル教会は、何よりも説教を重んじる教会です。ルターは若き日の自分を回顧して、「私は説教壇で語ることを怖れていた」と言っていますが、それは説教というものが決して疎かにできない決定的なものであることを物語っています。神が私たち人間に恵みを与え救つてくださる方法（手段）のことを特に「恵みの手段」といいますが、ルーテル教会では「説教」と「サクラメント（洗礼と聖餐）」がそれであると考えられています。つまり、それほど説教は決定的なものなのです。しかしいったいなぜ、それほどまでに説教が大切なのでしょうか。

「信仰は説教から来る」。これが答えです。実はこの言葉はパウロの言葉（ローマ一〇章一七）によるものなのですが、聖書のギリシア語原文には「信仰は聞くことから来る」と書いてあります。ルターはギリシア語の聖書をドイツ語に翻訳したのですが、その際、この

「聞く」という言葉を、より現実的具体的に、かつ厳密によく理解できるようにと、「説教」という言葉で訳しました。つまり、この聖書のみ言葉が意味するところは、すなわち「信仰は説教を聞くことから始まる」ということです。そして、聖書は更に続けてこう語っています。「聞くことはキリストの言葉から来るのである」。

信仰は、神と人との本来の正しい関係のことですが、その関係とは生きた人格的な関係です。そして、人格的な関係とは、生きた我（自分）と生きた汝（相手）との関係ということです。ですから私が相手の心をよく知り、その相手と本当に生きた関係を持つためには、ともかくにも、その相手が口を開いて何か語ってくれなければ何事も始まりません。そして、その相手が語ることを真剣に聞かなければ、私には相手が誰であるかもわからず、生きた関係を持つにも持てません。すなわち、神（汝）と私（我）との生きた人格的な関係である信仰は、私の真実の相手である神が、事実まず口を開き、それを私が聞くということから始まり育っていくのです。そして、神が口を開いて語る、つまりキリストが語るその言葉が「説教」の言葉なのです。ですから「信仰は説教を聞くことから始まる」のです。

しかし、それにしても私たちは時々、不思議に思うかもしれません。説教壇に実際に立っているのはキリストではない。牧師が立っている。聞こえてくるのはキリストの声ではな

く、牧師の声である。すなわち神の言葉ならぬ人の言葉が聞こえてくる。なるほど、そのとおりです。しかし、こここそが最も肝心なところでは。ルターはこう言っています。「しかし、私は説教を聞く。しかし、いったい誰が語っているのか。牧師か。いや、そうではない。牧師に聞いているのではない。なるほど、声は牧師の声である。が、実に神こそが、そこで説教され語られたみ言葉を語りたものである」。説教を語っているのは説教者（牧師）ではなく、実にキリストご自身なのです。説教とは、牧師の口を通してキリストご自身が語っておられる言葉なのです。つまり「説教はキリストの言葉から来るのである」。

牧師は聖書に基づいて説教を語ります。キリストの業と言葉を語ります。つまりキリストを語ることに集中します。もちろん説教の中で牧師個人の感想や思いが語られる時もあるでしょう。しかし、その奥にある神の声を聞きとらなければなりません。そこで説教において大切になってくるのは、よく聞きとる耳です。よく聞きとる耳とは、信仰の耳です。「耳のある者は聞くがよい」とイエスもおっしゃいました（マタイ一三章九）。またパウロも自分の体験を次のように、テサロニケ教会の人々に伝えています。「あなたがたがわたしたちの聞いた神の言を聞いた時に、それを人間の言葉としてではなく、神の言として——事実そのとおりであるが——受けいれてくれたことである。そして、この神の言は、信じるあなたが

たのうちに働いているのである」(第一テサロニケ二章一三)。

以上をまとめてみれば、説教とは、説教者の口を通して、キリストご自身がキリストご自身のことを語っている言葉だということです。ですから説教は「神のみ名によって」語られますし、そこにはまことの権威があるのです。

八、キリストに触れ、キリストを味わう

——神の言葉としてのサクラメント（洗礼と聖餐）

ローマ・カトリック教会の教会法をひもとくと、サクラメント（聖礼典）についての規定は、第三部「物について」の中で扱われています。つまりローマ・カトリック教会は洗礼、聖餐、堅信、告解、終油塗油、叙品、婚姻の七つをサクラメントに定めています。これも「物」として、つまり、キリストの恵みを伝達する仲介物として規定しているのです。このような礼典理解に対し、ルターは純粹にキリストの設定になる礼典は洗礼と聖餐であると、これを物としてではなく、救いの力そのものとして理解していきました。

洗礼も、聖餐も、新約聖書においては多様な理解がなされています。洗礼は、「罪を洗い」、「聖霊と光を与え」、「キリストの復活にあずからせ」、「再生を与え」、「主の体と一つにする」。また、聖餐は「罪の赦しを与え」、「パンとぶどう酒によってキリストの肉と血を与え」、「キリストの契約を確かなものとし」、「終末を先取りし」、「今永遠の命を与える」。ル

ターはもちろん、そのどれをも否定するわけではありません。しかし、その sacrament 理解の最大の特徴は、彼の「説教は聞くみ言葉であり、洗礼は触れるみ言葉、聖餐は味わうみ言葉である」との言葉の中にあります。彼は洗礼や聖餐をみ言葉として、つまり、私たちが細心の注意を払って聞き取らねばならない福音として理解していくのです。そのことはまた、み言葉という地平において、説教も、洗礼も、全く平等であることを意味しています。それがいつの間にか、カトリック教会においては sacrament が中心で、説教が付属物のようになり、逆にプロテスタントにおいては説教のみが中心に来て、sacrament が脇へ押しやられてきたのは悲しむべき事でした。アルトハウスはこの両者の関係について次のように語っています。「 sacrament は説教において語られる福音とは違った別の恵みを分かち与えるのではない。たとえ違った形であるにせよ、一つと同じ恵みを与える。神のみ言葉はいろいろな形で私たちに近づく。み言葉と sacrament とは、相並んで立つのではなく、むしろ両者は同じみことばの異なった形態である」と。説教は時として、誤解をもつて受け取られることがあるかもしれませんが。しかし、聖餐は、見える言葉として、誤解の余地のない形で目の前に差し出されます。その意味では両者は互いに完全でありつつ、互いに補完し合うものとも言えるでしょう。現代においても一度説教と sacrament の関係が深く問われな

ければならないのです。

さらに、ルターのこの言葉は、聖餐の理解においても大きな特徴を与えます。聖餐はみ言葉である限り、キリストの現臨（リアルプレゼンス）をもたらし、また、何よりも信仰をもつて受け入れることが要求されます。それは決してツヴィングリが語るように、キリストの十字架の出来事の単なる象徴でもなければカトリック教会の語るように、物質変化によるキリストの肉と血というわけでもありません。キリストの肉はパンと「共に」、パンの「中に」、パンの「もとに」おられるのであり、信仰をもつて受け入れる時、それはまさしくキリストの肉と血そのものとなるのです。信仰を持たずに食するとき、それは単なるパンでしかなく、「ふさわしくないまままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのであり、自分にさばきを招く」（第一コリント十一章）のです。

しかしながら、「ふさわしい」とは何かについて今日問題とされている事項に小児陪餐の問題があります。いくぶん慣例的に、聖餐は「ふさわしさ」を求められるがゆえに、十字架の意味を十分にわきまえ、信仰の告白をなしたものにのみ、つまり堅信式を終えたもののみ与えられてきました。しかし今日、信仰告白をなさない重度の障害者はどうなるのか、小児による大人とはちがった形の告白も、告白ではないか、小児もまた主の恵みから除

外されてはならないのではないか、あるいはまた、子供を見守る親や教保の信仰などといった観点から、小児陪餐が開始され始めています。日本のルーテル教会の場合、聖餐が持つ養育的側面を考慮して就学前後に初陪餐が考えられていますが、もつと年齢を引き下げるべきだとする意見などもあるのが現状です。いずれにせよ従来の慣行に対して大きな変更が加えられるのですから、年月の経過の中で議論も深められ、一致した方向が見いだされなければなりません。ただ、小児洗礼は堅信式によって補完されるべき未熟な洗礼を意味するのではなく、それ自体、神の恵みによる完全なものとして、洗礼において壮年、小児の区別が取り扱われたことは喜ばしいことです。

九、神の慈愛と峻厳とを見よ

——律法と福音

人は本来、その生から死までのすべてを、神のみ手の中に抱かれています。「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである」(ローマ一章三六)。しかし、私たちはその神に背く。さまざまの罪におちいる。「ああ人よ。あなたは、神に言い逆らうとは、いったい何者なのか」(ローマ九章二〇)。それはアダムの昔からそうでした。ということは、私たちは一人の例外もなく、罪のゆえに裁かれ滅びるほかないのでしょうか。ところが神のみ心は大きく深い。

すなわち、神はそこで、こうした私たち人間に、二通りの仕方です、ご自分の気持ちと力とを示すこととされたのです。それが律法と福音です。まず律法。すなわち神は、例えば「殺してはならない」という具合に、何とか人に罪を犯させまいと、罪なるものを警告し押しとどめようとなさいます。その昔、モーセがシナイの山の上で神からいただいたいわゆる「十

「戒」がまさしくそれです。しかも、その罪なるものをただ警告し押しとどめるばかりでなく、一人一人にその罪を自覚させ、何とかして私たちの目をしっかりとご自分のほうに向けて歩くことができるようにとされるのです。つまり、パウロも言うように、「律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったであろう。すなわち、もし律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりなるものを知らなかったであろう」(ローマ七章七)。まさしく「律法によつては、罪の自覚が生じるのみ」(ローマ三章二〇)なのです。「……すべし」、「……すべからず」と、神がお命じになるのですから、ここには神のたいへん厳しいお気持ち表われていると言えます。律法は峻厳です。

さて大きく考えれば旧約聖書とは、そういう律法が中心に記された神の書物だと言えるでしょう。ところが、このようにして神が、こうした律法を通して導いておられるのに、人はそれでも罪を犯す。またその犯した罪を償うこともできない。また更にもっと厄介なことに、神に「……すべし」、「……すべからず」と命じられたことを、人はきわめて表面的に受けとめ、神のみ前にそれらしい何事かの行いをして、その業わざによつて神から救われると高慢にも自己過信することも多いのです。しかし、イエスは言われる。「昔の人々に『殺すな……』と言われていたことは、あなたがたの(律法で)聞いているところである。しかし、

わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない」(マタイ五章二一―二二)。つまり、本当に誠実に考えてみれば、自らの力と業で律法を全うすることはできないのです。とすれば、私たちを待ちうけているのは、滅びと絶望のみということになります。そこで次のようなパウロの嘆きはまた、私たち自身の嘆きの声でもあるでしょう。「わたしたちは、律法は靈的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であつて、罪の下に売られているのである。わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえつて自分の憎む事をしていからである。……わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ七章一四以下)。

律法を前に自らの滅びを泣くパウロ。しかし、このパウロはこの嘆きの言葉の直後に、実にこう言い放ちました。「わたしたちの主イエス・キリストによつて、神は感謝すべきかな」(ローマ七章二五)。なぜでしょうか。ここに福音が登場します。つまり、神は二通りの仕方です。私たちに近づかれますが、その一つである律法を全うできない私たちが負うべき滅びを、驚くことに神は自らの独り子イエス・キリストに負わせ、人のすべての罪と罰を帳消しにしてしまわれたのです。これがあのゴルゴタの丘の上の十字架の出来事なのです。「キリ

ストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた」(第一ペテロ三章一八)。こうして、あろうことか私たちはキリストのゆえに無条件に救われたのです。まさに、アーメン。それゆえ、私たちはこのキリストにもう全てをゆだねるほかなく、このゆだねることを信仰と言います。したがって「わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである」(ローマ三章二八)。

律法の壁につまずいた私たちは福音によって救われる。つまり要するに、律法と福音、この深く内的に連関した二つの仕方を通して神は私たちに接してくださるのです。まさに「神の慈愛と峻厳とを見よ」(ローマ一章二二)と言うべきです。もちろん、言うまでもないことですが、神の目的は人の滅びではなく救いですから、中心は律法でなく福音です。ですからルターも、福音こそが神の「本来のわざ」、律法はそれに比べれば「非本来的なわざ」だと言っています。

さて、キリストが十字架の上で死んでくださったがゆえに、全ての罪と罰がなくなつた。だから私たちの罪を警告し押しとどめる律法の役目(これを律法の第一用法と言います)も終わつた。また私たちに自らの罪を自覚させる律法の役目(律法の第二用法)も終わつた

……、すべてよしと言えるでしょうか。否です。実際、今日もまた私たちは罪を犯しています。神の慈愛を忘れて自分勝手に生きています。信仰者でも例外ではありません。ルターは信仰者を「義人にして同時に罪人」と言いました。つまり信仰者であっても、今もやはり律法は必要なのです。いつも常にキリストのほうへとしっかりと導かれねばならないからです（これを律法の第三用法と言います）。

しかし、律法に促されて自らの罪の深さが身に染みれば染みるほど、その罪にもかかわらず、それを十字架の上でゆるしてくださいとくださるキリストの愛の福音がますます身に染み、ありがたいのです。つまり信仰者は律法と福音に生きるのです。

一〇、キリストと聖徒の交わり

——教会のしるし、見える教会と見えない教会

『キリスト者の自由』を読むと、たいていはフランス革命以後の、近現代の「自由」概念から出発して、個人の自由という面で理解していこうとします。ゲータやヘーゲルもそうでしたし、早くにこれを「聖書の研究」誌上に紹介した内村鑑三もそうでした。しかし、ルター自身が意図していたところを探りながらこれを読んでいくと、事情が全く違うことが分かります。

たしかにそこには、個への注目はあるのですが、それはあくまでも、「聖徒の交わり」という共同体のなかにある個を問題にしているのです。ルター自身に共同体意識、共同体指向が強いことを見落とすと、このよく知られた名著も、理解半ばに至らずということになるでしょう。

キリストとの交わり、聖徒たちとの交わり、これはドイツ民衆のために、ルターが執筆を

始めたときからの主要テーマでした。靈的な、内的な、信仰の共同体としての教会への注目
は、ルターがごく初期から変わらずに持ち続けたものでした。信仰者はこの交わりのなかに
位置付けられています。単なる単独者としては存在しないのです。目に見える外的な教会を
中心に据えてすべてを推し量っていた当時の教会と神学に対して、これは強烈な一撃となり
ました。

こういう意味で、教会は「聖徒の交わり」、「聖徒の集まり」だと言われるのです。「使徒
信条」にあるこの言葉を、ルターは中世風に「聖なるものを媒介とする交わり」とは理解せ
ずに、キリストを中心にした聖徒が集まって、交わりをもつ場を意味すると理解し、これを
強調したのです。もちろん、この「聖徒」は、すでに聖くされた者ということではありませ
ん。神の働きを受けて、聖い者とされ始めた者、たえず新たに聖くされつづけていかなけれ
ばならない者ということなのです。これは、キリストを頭とした、からだにたとえられる、
一体の共同体です。人格的な信頼の共同体です。「同じ形」、すなわち、キリストと同じにな
る共同体です。ものすら分かち合う共同体であり、使命を共にする共同体です。教会のある
べき、生き生きとした姿が目に見えませんか。

しかし、ルターはそれにとどまりませんでした。教会に関しても、内なるものは外に現わ

れてこずにはいないという基本的な考え方が当てはまります。靈的、内的な信仰者の共同体は、この地上のどこかでみことばを聞くために、必ず具体的な集まりに集まってこずにはいないというわけです。だから、みことばが福音の説教と聖礼典として与えられるのですから、このふたつが、教会が教会である「しるし」（力ある、実効あるしるし）だと言われるのです。

聖徒はみことばと聖礼典とに集まってきます。これによって強められ、交わりをふかめられるのです。集まってくるのであれば、散ってもいきまます。教会のダイナミックな動きです。みことばへと集まるところで、教会はこの世界のなかでの、見える教会となつていきます。しかし同時に、教会は散らされて、この世界のなかへと派遣され、送り出されていくものでもあります。散らされるというのも、神の働きです。直接、間接に、礼拝から散っていくひとりひとりが、神から遣わされる宣教師、宣教師というわけです。みことばと聖礼典との礼拝が、このような生き生きとした動きのなかで、大事な鍵の位置を占めていることが分かるでしょう。それだけに礼拝を大切にしたいものです。

一一、神の奉仕としての礼拝

——教会の働き(1)

礼拝のことを英語でサーヴィスと言います。サーヴィスであるからには、サーヴィスする側とサーヴィスされる側とがいるわけです。礼拝ではだれがサーヴィスし、だれがサーヴィスされるのでしょうか。人間一般の宗教で考えると、拝む対象に対して、人間がさまざまな形でサーヴィスします。これはあらゆる宗教に共通していると思えます。キリスト教も宗教ですから、もちろん他の諸宗教と共通している面をもっています。しかし、キリスト教の独自性を言うならば、礼拝はたしかにそのひとつでしょう。キリスト教の礼拝では、神が罪人である人間にサーヴィスしてくださるのです。

確かにキリスト教の始まりのころ、初代キリスト教の時代には、礼拝は神が人間に奉仕するものと考えられていました。しかし、ギリシア、ローマの諸宗教の影響もあって、人間が神に仕えるという要素もだんだん入ってきました。特に、キリスト教がローマ帝国によつ

て公認され、さらに国教とされてからは、その面が一段と強くなりました。修道院運動によって教会の改革を果たそうとして、ベネディクト修道院を興した六世紀のヌルジアのベネディクトは、礼拝についても、「礼拝は神の働きである」ことを強調しました。しかし、それ以後の中世を通じて、礼拝は壮麗、華麗に、人間が神にサーヴィスするという面を強くしました。聖餐式はミサと呼ばれましたが、それは神の恵みの賜物をいただくのではなくて、司祭が聖壇のうえで、キリストを犠牲に捧げて、神の怒りをなだめる儀式になっていたのです。

宗教改革は、キリスト信仰から始まって、改革を礼拝にまで及ぼしました。すべてを神中心に、しかも神からの働き掛けとしてとらえていくのですから、礼拝もそういう角度で見直されます。礼拝は「神の奉仕」であることが再び、はっきりと確認されました。礼拝は罪人に対して、神がイエス・キリストにおいて恵みをもって、みことばをもって、仕えてくださるといふことが、始めから終わりまで起こる場ということになります。キリスト信仰に即してこのようにとらえられるようになった礼拝は、もちろん初代キリスト教以来の礼拝の伝統に立ち戻りながら、ルターやその仲間たちの手で具体的に形作られていきました。

みことばによって、キリストのできごとを、わがこととして、この身にいたたくというこ

とが起こるのです。一回限り、ゴルゴタの丘でキリストの十字架によって成し遂げられた救いが、語られるみことばにより、また、目に見えるみことば（聖礼典）によって、まさに私のためのものとなるのです。私に手渡されるのです。キリストの、これこそ真に厳肅な「出血サーヴィス」を原点として、神のサーヴィスが今私に起こるのです。これにあずからないではおれないということにもなります。

礼拝のすべては、この中心的な考え方に基づいて構成されていきました。みことばの朗読、それに基づき説教が中心に置かれますが、神の、みことばによるサーヴィスとしての聖餐も、それと並ぶ位置を与えられました。しかし、信仰告白も、祈りも、会衆の讚美歌も、音楽も、さらには教会堂も、絵画も、礼拝で起こるすべては、神の奉仕という信仰的理解のもとで新しい意味を持つようにされたのです。たとえば、「会衆の讚美歌は会衆の説教である」という具合に。このように構成された礼拝に、人々は集まってきては、そこから散らされ、遣わされて行つたのでした。

一二、伝道し、奉仕し、教育する

——教会の働き(2)

主イエスを信じる者は、贖われて主のものとなる、とルターは『小教理問答』に述べています。聖書の「贖い」という言葉のもともとの意味は、身代金を払って買い戻すということでした。昔の奴隷売買をイメージした言葉でしょう。しかし、まさに身代金を払われたら、その人は新しい買い主のものとなります。「あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」(第一コリント六章一九—二〇、新共同訳)。

そこで私たちは、主のものとして「手と口とで福音を告白する」ようになっていきます。自分が立派な者になれたからでなく、自分も神の愛の対象として贖われたからにほかなりません。キリスト者は立派な人であるはずだと人々が思っているのは誤解で、信仰者も罪人にすぎませんが、しかし、もし本気で主の救いを信じるなら、そこに変化が起こってくるのは

当然でしょう。それは第一に、このような自分を愛してくださった神の愛を証しし、その救いの働きを告白していく伝道となります。

信仰に生きる者は、もはや自分の救いのために善行を積む必要はありません。しかし自分にまで及んで来た神の愛を、自分の所でストップさせてはなりません。むしろそれに押し流され、神の働きに巻き込まれ、仕えさせられるのです。隣人のためにひとりのキリストとなつて奉仕していきます。その隣人の背後にも、それは「わたしにしたのである」(マタイ二五章四〇)と言われるおかたが立つておられます。

ルターの時代は、社会的にも変動の時でした。農村を中心にした生活から、次第に都市の形成へと向かつていきました。農村も問題でしたが、都市も多くの出稼ぎ人と貧しい人々に満ちていました。その一方、大きな財をなした財閥と呼ばれるような人々も出ています。そのような中で、教会の中の奉仕はもちろん、教会がある町全体の福祉のために、教会の人々が心をくだき、奉仕をするように図られました。必ずしも成功したとばかりは言えないのですが、その精神はいろいろな形で受け継がれています。

宗教改革の教会は一般の教育の推進と共に、信仰の教育の必要性を強く意識しました。ルターが教理問答や礼拝の順序などを定めたのは、その直接的な現われです。彼はしばしば自

分自身を、あたかもまだキリスト者でない者のようにみなし、その身になって必要なことを考えています。もちろん、彼は洗礼を受けた信仰者であり、牧師であり、神学者でした。けれども、まるで子供のように教理問答を繰り返し学び、単なる知識でなくて、それが示している信仰にたつことができるように生涯努めたのです。

こうした宗教改革者の態度は、教会においても受け継がれていかなくはなりません。教会はしばしばキリストのからだに譬えられます。それぞれの部分が分に応じて働いて、全体の益になるように努めていかなくはなりません。自分は口でないから、自分は手にはなれないからと言って、いたずらに手をこまねいてはなりません。誰もふだんは気にもとめない足の指先が怪我をしたら、たちまち体全体の調子が狂って、指先が大事な働きを担っていたことを覚えさせます。痛さを感じるのは足の先だけでなく、体全体が感じるのです。お互いが仕え合い、とりなしあつてこそ、有機的な体ということが出来ます。仲間同士の言葉が説教と同じように福音による慰めと生命を伝えることが出来ます。そして体のそれぞれの部分は、小さな赤ん坊の時から動いています。無駄な動きをしているようでも、それで成長し、強くなつていきます。手が完全なものになつてから、足が生えてくるわけではありません。まだ成長していないからと言って、伝道や奉仕の働きから除外されているわけではない

のです。私たちもそのような体に連なるものとされています。

一三、牧師として、そして信徒として神に仕える

——万人祭司

ルーテル教会は万人祭司の教会であると言われています。万人（全信徒）が祭司であるということ。しかし、いったい、祭司であるとはどういうことなのか。祭司とは神に仕える人、神に奉仕する人のことです。ですから万人が祭司であるということは、洗礼を受けた信仰者全員が、神に仕えることへと召し出されている、つまりそうした責任があるということです。そこでルターはこう言っています。「祭司は、再生の洗い（洗礼）において水と霊とによつて生まれる。要するに、すべてのキリスト者は祭司であり、すべての祭司はキリスト者である」。

事実、実際に神の目から見ても、人の救いに上下や身分による違いなどありません。万人（全信徒）が等しく神と出会い、神の救いにあずかる。したがって逆に言えば、万人に等しくその神に仕え奉仕する責任が与えられているわけです。つまり万人が等しく祭司なので

す。

ところが、注意しなければならぬことがあります。というのは、ここで言う「祭司」とは、広い意味で神に仕える者（すなわちキリスト者全員）のことで、狭い意味での「牧師」ということではありません。このところを誤解すると、たとえば次のような間違つた考え方をしてしまいます。すなわち、万人祭司とは万人が祭司なのだから「万人牧師論」だ、つまり教会に集う人が百人いたら、その百人全員が牧師だというわけです。しかし、これは全く非現実的です。また、逆に万人が祭司とは万人が牧師なのだから、牧師と信徒の区別がなくなる、するとつまり、万人が信徒でもある、すなわち万人祭司とは「万人信徒論」だと誤解される場合もあります。万人が信徒なのですから、教会に集う百人が全員、信徒であり牧師はいない。つまり「無牧師論」となる。しかし、これも間違いです。万人祭司論とは、全ての人が牧師という「万人牧師論」でも、逆に牧師が存在しないという「万人信徒論（無牧師論）」でもありません。そうではなくて、万人がキリストに仕え奉仕しつつ、その中で、ある人は牧師としての働きを、ある人は信徒としての役目を果たすということが、万人祭司論なのです。「（キリストは）、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになつた。それは、聖徒たち（キリストのゆえに聖

とされた者、すなわち信仰者の全て）をととのえて（神への）奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである」（エペソ四章一—二三）。

さて、牧師であれ信徒であれ、信仰者の全てが神への奉仕のわざ、つまり教会の務めを託されているわけですが、では、その信仰者の務めとは、具体的にいかなるものなのでしょう。ルターは『教会の教職の任命について』という書物の中で、教会の務めとして七つの事柄を挙げています。次の七つです。(1)、み言葉を宣べ伝えること（説教の務め）、(2)、洗礼を授けること、(3)、聖餐を執り行うこと、(4)、罪を帰し、ゆるすこと、(5)、捧げること、(6)、とりなしの祈りをする事、(7)、教えを判断すること。

ルターはこのように七つの務めを挙げていますが、この七つはバラバラにあるわけではなく、一つの確かな中心をもちつつ互いに関連し合っています。その中心とは、もちろん神のみ言葉を宣べ伝えることです。なぜなら、ルターが言うように、「教会は神の言葉によって誕生し育成され守られ強められるゆえに、教会はみ言葉なくしては存在しえないし、もしみ言葉がなければ教会であることを止めるのは明らかである」からです。したがって、そうし

た神のみ言葉は「正しく」また、「公けに（秩序立って）」説教される必要があります。決して不正確に自分勝手に語られてはなりません。そこで、そのために多くの信仰者の中から一人の人が選ばれ、訓練を受け、その人に、その大切なみ言葉の務め（説教とサクラメントの務め）が託されることとなります。すなわち牧師です。つまり、牧師の働きとは、まず第一に説教を語ることにあります。そのためにこそ、教会に集う多くの信徒が心を合わせ、祈りをもつて、その一人の人に牧師職を委託するのです。そして、多くの信徒のその委託の祈りに答えて神が、そのことを良しとしてくださるがゆえに、ここに一人の牧師が誕生するのです。つまり、牧師とは、み言葉を語り、サクラメントをほどこすようにと神が決めてくださったのであり、かつその人にその大切な務めを託すという信徒の熱い祈りがあつて初めて存在しうるものなのです。

ところで、そのようにして語られた説教のみ言葉は、その後どうなるのでしょうか。「わが口から出る言葉は、むなしくわたしに帰らない」（イザヤ五五章一一）と神は言われます。つまり、牧師の口を通して語られたみ言葉は、しっかりと聞かれる必要があります。そして、ここに信徒の第一の大切な務めがあります。説教のみ言葉を真剣に聞くこと。そこに信仰が育ち、やがてその人は家庭で、社会で、キリスト者としての証しの生活を送ることとな

るでしょう。

さて、洗礼の務め、聖餐の務めも、説教の務め同様、牧師に委託された働きとして、牧師が責任をもってとり行います。罪のゆるしはキリストのみにできることですが、信徒同士、キリストのゆえにゆるし合う中で、真実の「交わり」が形成されるでしょう。そして信徒にとって特に大切な役目は、捧げること（つまり、神に感謝を捧げ、讚美を捧げ、それを土台に教会と隣人に奉仕し、また教会を維持するために献金を捧げる）、そして他者のためにとりなしの祈りをする事です。牧師にも信徒にも、このようにそれぞれ多くの務めがあります。しかも、これら全ては神に祝福された喜ばしい務めなのです。

一四、信仰は神の働き

——信仰のみ（信仰義認）

「信仰のみ」、これがルーテル教会の旗印とすぐに考えられてきた面があるかもしれない。ルターの宗教改革やルーテル教会と言えば「信仰義認の教会」と、打てば響くように声がかかるというありさまです。中国語圏ではこのルーテル教会を、正式には「信義会」と呼称しているところが少なくありません。確かにそのとおりです。しかし、それは前回に取り上げた「恵みのみ、キリストのみ」に相呼応するという意味でのみ、そう言えるのです。

私たちの信仰だけが、義認や救いに貢献するとしたら、そのような信仰は、人間の行いと変わりのないものであり、結局のところ、人間の自力の救いということになってしまします。宗教改革は、中世を批判して、「行いによる義」に反対しながら、つまるところ行いを信仰に置き換えただけのことになってしまおうでしょう。

「あなたの信仰があなたを救った」と言われるイエスのおことばや、「信じます。不信仰

なわたしをお助けください」というあの父親の言葉が持つ意味を考えてみなければならぬでしょう。ここからは、私たちが自然のまま、生まれつきのままでは、神に対する信仰など持つことがないということや、まず聞き取らなければならぬのです。信仰を持つというのは、人間のこころの持ち方や実感などではなく、あの父親のように、自分に分かるかぎりでは、不信仰な自分しか見えてこない、実感できないというのが、人間のほんとうの姿でしょう。律法が人間に、自分の罪の姿を明らかにするというのは、こういうことなのです。

しかし、信仰がある、それは確かに「神の賜物」としてあるのです。あのイエスのおことばは、「神があなたのうちに働いて起こしてくださる、そのあなたの信仰こそがあなたを救う」という意味にはなりません。信仰すらも、それが単に人間の信仰であれば、救いに向けて何の力もないのです。ルターとルーテル教会が「信仰のみ」を、「恵みのみ」に続けて告白しつづけてきたとすれば、それは、信仰すらも神の恵み、神の賜物にほかならないことをあかしし続けてきたということです。

したがって、「信仰のみ」は、「恵みのみ」と同じことを言っていることとなります。「イワシの頭も信心から」というのとは全く違うことがよく分かります。「イワシの…」には人間しかいませんが、「信仰のみ」は「恵みのみ」なのですから、神と人間が相かかわってお

り、しかも神がそこで初めから終わりまで、徹頭徹尾主体であられることが、私たちの信仰告白なのです。

したがって、この「信仰のみ」においては、私たちの救いのために、神が恵みをもって、イエス・キリストにおいて働き、かつ働きつづけてくださることが決定的なことです。ですから、この「信仰」は「キリスト信仰」、イエス・キリストを救い主と信じる信仰にほかなりません。キリスト以外には、私たちが信じ、信頼し、よりたのむかたはいないということです。それは、神からの賜物としてのキリストに注目し、これにひたすら感謝と讚美をもって応答していくのです。神からの、こんなに素晴らしい、こんなに思いもかけないプレゼントはないという思いです。

しかし同時に、このキリストは、私たちの生きた模範です。そうなら、信仰において、私たちも、このキリストのようになるという歩みへの促しを与えられています。ルターが『キリスト者の自由』のなかで言っているように、まずそれは他者、隣人のための執り成しの祈りとなり、さらに具体的に他者、隣人のニードに応える奉仕ともなるでしょう。この世界に対する神のみこころの一端に触れているのですから、この世界に対する責任も共同で担っていく用意がなくてはなりません。これまた、「信仰のみ」がもっている射程のなかに含まれ

ていることなのです。

一五、恵みの神の前での人間

——義人にして同時に罪人

人間とは何か、信仰者とは何か、おそらく様々な答え方ができるでしょう。たとえばヘブル人への手紙の作者は人間（信仰者）とは旅人だと答えています。「これらの人はみな、信仰をいただいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした」（一一章一三）。

ルターはどう言うでしょうか。「義人にして同時に罪人」。それがルターの答えです。義人とは、神に罪なしとされた義しい人、したがって、救われた者のことです。罪人とはその逆です。すると義人にして同時に罪人とは、どういうことでしょうか。一見すると、実にあいまいな言い方です。「あの人は表面的には義しい人物のように見えるが、その実、とんでもない悪人だ」というようなことでしょうか。ジキルとハイド氏、二重人格？

もちろん、そういうことではありません。ルターは人間を考えると、その人間を観念的に真空の中に置いては考えませんでした。と言つてまた、移ろいやすい人間関係の中でのみ考えたのではなく、彼は常に人間を神の前に立つ人間として考えました。神関係の中で人間を捉えたのです。するとルターの目には、神の前での信仰者は二重のあり方で立っているということが見えてきたのです。すなわち「義人にして同時に罪人」。

では、同時に義人であり罪人であるとは、どういうことでしょうか。すべての答えは聖書にあります。「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによつて義とされるのである」(ローマ三章二三—二四)。つまり、罪人である私を、にもかかわらず神が義しい者としてくださったと書いてあります。しかもそれは、私が何か義しい善いことをして、罪をつぐなつたからではなく、キリストが十字架の上で私の代わりにつぐなつてくださったことによつて、私の罪はゆるされたのです。それも全く無代価で。私は義人となつた、救われた!

しかし、事実として私自身は私の罪をつぐなつてはいないし、またつぐなう力もありません。したがつて、その点からすれば、私は依然として罪人です。罪人のままなのです。いや、それどころか、今日もまた、私は新たに罪を犯します。他の人ならいざしらず、神は全

てをご存じです。しかし、だからそこに罪人が事実おり、罪が事実あるからこそ、神はキリストのゆえに、あの十字架のゆえに、この罪人たる私を救ってくださいなのです。「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ六章一三)とキリストは言ってください。そこで私は義人となる。つまり、実際、事実として、私は確かに罪人だが、キリストのゆえに同時に義人なのです。同じことをパウロはこう言い表わしました。

「わたしがすでにそれ(神からの義)を得たとか、すでに完全な者になつているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによつて捕えられているからである」(ピリピ三章一二)。これが、すなわちキリスト者の真実の姿(実存)です。

さて、このようにたどつてきますと、ルターのこの人間観は、単に、人間とは何かを教えているのみならず、神の深い底知れぬ恵みという事実を私たちに教えてくれていることに気づかされます。罪人である私を、一つの条件を出すでもなく、全く無代価で義しい者と認めてくださるという計り知れぬ神の恵みの大きさ。つまり、私たちの前にあるのは、ただ大きな神の恵みのみです。だから私はその恵みの神を信じるのです。すなわち、この「義人にして同時に罪人」という信仰者の定義はまた、神の恵みの計り知れぬ大きさの表現でもあるの

です。

ところで一つの事柄を「義人にして罪人」という具合に二重に定義することがルターの（いやキリスト教の）大きな特徴です。聖餐式のパンは、パンであり同時にキリストの肉そのものです。説教は、人の言葉であり同時に神の言葉です。いや、そもそもイエス・キリストご自身、神であり同時に人であられた。この二重性こそ真理です。つまり、神の恵みはあまりに大きすぎて、人間が表現するときには、二重に言い表わさざるをえないのです。

一六、自由ゆえの愛、愛ゆえの自由

——キリスト者の自由

ルターは一五二〇年、『キリスト者の自由』を著わし、その冒頭の部分で、キリスト者とは何であるか、また、キリストが獲得してくださった自由とはどのようなものであったかについて、次の命題を掲げています。

キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも服従しない。

キリスト者はすべてのものに仕えるしもべであって、だれにも服従する。

この二つの命題において、キリスト者は、自由でありながら、しかも、しもべであるという矛盾した概念で捕えられています。しかし、このような矛盾する二つの概念の中で統一的にキリスト者の姿を捕えることは、「キリスト者は義人にして同時に罪人」といった言葉に見られるように、ルターの大きな特徴でもあります。

この二つはどちらかに偏って受け止められるのではなく、まさに「同時」であり、キリス

トの十字架に向き合う緊張感と、そこにおいて表わされる福音がその同時性を成り立たせるのです。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三章一六)との神のみ心を信じるとき、「だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か」(ローマ八章三五)と、パウロと共に言わざるをえません。そこに何者にも束縛されることのない自由の原点があります。しかしこの自由が、キリストの私たちに向かう、つまり他者へと向かう愛において与えられたものである限り、その自由は私たちにおいても他者へと向かわざるをえないのです。ルターは言いまします。「神は自らをナザレのイエスに縛りつけられるほどに自由なおかたであった」と。つまり、福音によって与えられる自由は、必ず他者へと向かい、みずからを他者へと縛りつけるまでに自由なのです。

宗教改革当初、ルター派教会が成立しつつある時、教会はさまざま問題を解決しなければなりません。牧師の養成をどうするか、礼拝や聖餐式の守り方は、子供の教育は、埋葬は、離婚の処理は……。こういった山積する問題は、いずれも当時のローマ・カトリック教会とは異なった聖書の見方、教義上の問題、風習の相違から必然的に生じてきたもので

した。しかし、教会はそれらのことを差し置いて、まず真つ先に貧しい人、悲しんでいる人、この世からはみ出てしまった人たちに向かつていきました。彼らを救うため、真つ先に共同金庫規定を制度化していったのです。教会の中に大きな箱を設け、人々はお金や、日々の食べ物の幾ばくかを持ち寄り、その中に入れていきました。このような姿勢もまた、キリスト者の自由を示す姿の一つだったのです。

私たちは世にあつて生きるとき、ただ単に自分だけの考えや、ものの見方で判断したり、決断したりしません。必ずそこにイエス様のものの方や判断はどうか、神様だったらその同じことをどう判断されるだろうか。そういった私たちとは別の見方、判断を加えていきます。そこに他の人とは違う重層的な、奥の深い、短絡的でない、ものの見方ができるゆえんがあるのです。しかしながら、そのようなものの方、判断は、時として職場や家庭の中で他の人と衝突してしまふことがあります。時には乗り越えられない壁を感じたり、家族にもわかつてもらえず悲しい思いをすることもあります。しかし、そのような時にこそルターが語った言葉に耳を傾けたいと思います。「『勝利を敗北の中に隠されていた』、『弱さをその強さの中に秘められていた』、『死の中にその生を隠されていた』あのおかたを見ようではないか」と。

イエス・キリストは、強くあることができるときこそ弱くあり、勝ち誇ることができるときこそ敗者のごとくあられました。それほどまでに自由であられ、他者のことを想っていかれたのです。この愛と自由こそが、私たちの前に次々と現われ、立ちはだかる壁と限界とを打ち破ることができなのです。

一七、信仰の内と外、内の外、内から外へ

——祈り

「たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」(第二コリント四章一六)とパウロは申します。内なる人と言えば、私たちは自分の個人的な、あるいは精神的な側面を考えるのが普通です。外は、それに対して外的肉体的なこと、さらには自然界や社会的な側面を思い浮かべるでしょう。

そこでいったい信仰の問題は内なることか、外のことかと問えば、当然のように内側のこととするでしょう。しかし、他方では私たちは自分の信仰でさえ、自分のわざではなくて、神の働きかけであると告白します。「信仰はわたしたちのうちにおける神のわざである」とルターも言っています。すると、それは外からのわざです。その「外」は普通に考える外界と同じなんでしょうか。逆に信仰は内なることと考える時、その内は、私たちの精神的な働きとか、心理的なことと同一視してよいのでしょうか。またわが国では昔からいろいろな修

行において、「形から入る」ことがむしろ強調されてきました。しかし、それは所詮わざからのことであるから、信仰の理屈には合わないということになるのでしょうか。

ルターは「靈」についても、「内」という言い方においても、信仰のこととして考える時には、それをすぐに精神的、心理的なものと考えてはいないようです。むしろ、神からの働きを受けている人を、靈的といい、内的と考えます。肉体をもった全体の人間を含めて、内的、靈的というのです。すると、「外」は神から離れたあり方にほかなりません。どんなに心で感じているからといっても、それは必ずしも内的なことではなく、もしそれが自己中心の思いに支配されているなら、まさに「外」であり、「肉」にほかなりません。

私たちが外と思っている事も、実は信仰的、内的なこととして受け止めている場合もあります。だから、外面的なことは、すぐ律法の「わざ」に連なると考えるのは誤りということになります。

信仰はそれ自体、礼拝し、聖書を読み、祈り、教会の交わりに参加したりする、外的な行為を含んでいます。それは、この分け方でいくと「内」の行為でありえます。神との交わりは、実際のな外に現われる行為において、私の外から語りかけられる神のみ旨に従って生きることが求めます。それは、いわば「内」なる外ということになります。たとえ何の言葉も

言わないでも、祈りが心に生まれてくることはたしかですが、そのような心の具体的な現われとして、またさらに心をかき立てることとして、口に出して述べられる祈りは大切です。しかも、口ではひとつのことを言っても、心では別なことを考えていることも実際には起こります。どれほど真剣に、ひたむきに祈っているか、ということを探られると、私たちは当惑してしまいかもしれません。けれども、ちょうどほかの人が口で言ったことを、私の気持ちとして受け取ってくれ、またそうでしかないように、神さまも私の行為として私たちの祈る言葉を受け取ってくださいるに違いありません。雑念をもつからといって祈りについて疑うのではなく、悪魔が祈りの力を知っているから、懸命に妨害していると考えて、祈りの力により一層頼っていかなくてはならないのです。ルターは、間断なく心の中で祈り続けよと言ふと共に、どれほど一生懸命に祈ったかということによって事が決まるのではなく、むしろ「祈れ」と命じられているから祈るのだと言います。祈りの確かさは、それを命じ、待つておられる相手の神さまのほうにあるからです。

そのような慰めをもつと共に、実際に努力し、繰り返すことを努めていくことが必要です。『キリスト者の自由』の中に、私たちは最も自由な君主でありながら、同時に最も義務を負う僕にほかならないと述べられています。主を信じることによって、私たちは自分の思

いを束縛する一切の力から解放されます。しかし、それは解放感にとどまっているのではなくて、積極的に仕え、取りなしていく思いへと展開していくはずなのです。

一八、信仰の果実としての行い

——善きわざ

キリスト教信仰は、ある面たいへん倫理的だとも言われます。それはキリスト教の信仰者の多くが、正しい倫理的な生活を送ることができているからでしょう。事実、キリスト者は、善い行いを人々の先頭に立つて行っています。これは誇ってよいことです。しかし、ここにまた落とし穴もあります。善い行いが他の人に見せるためになされる場合があるからです。イエスは言われます。「だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラツパを吹きならすな」(マタイ六章二)。善き業はむしろ隠れてなすぐらいの気持ちが必要です。

しかし、善い行いについては、実はもっと大きな危険があります。と言うのは、人はその善い行いを神との取引条件にしてしまうからです。善い行いをしたから、それと引き換えに神よりの救いを手に入れようとするのです。「主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によつ

て多くの力あるわざを行ったではありませんか」(マタイ七章二二)。「だから天国に入れてください」というわけです。

しかし、パウロは問い、そして答えます。問い「あなたがたが御霊みたまを受けたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか」(ガラテヤ三章二)。答え「わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである」(ローマ三章二八)。ルターはこのことを、人が救われるのは善い行いによつてでなく、ただ「信仰のみ」によると言いました。いわゆる信仰義認の教えです。行いではなく、信仰のみ、恵みのみ、これが救いの根拠です。

ところが、この信仰義認の教えを説いたルターは、ある人々から彼は善い行いを禁じているのだと非難されました。また、これは仏教でのことですが、ただ一途に仏にすがれという唯信ゆえに信あれば悪人もまた救われる(悪人正機)と説いた親鸞も、彼は極楽往生するためには、まず悪を行えと主張しているのだと誤解されました。いや、なによりもパウロ自身、こう嘆いています。「善をきたらせるために、わたしたちは悪をしようではないか(わたしたちがそう言っていると、ある人々はそしっている)」(ローマ三章八)。

もちろん、パウロもルターも(そして親鸞も)決して善い行いを禁じても軽蔑したりもし

ていません。むしろ大いに勧めます。ただそれは救いのための交換条件とはなりません。つまり、「善き業→信仰と救い」ではなく、「信仰と救い→善き業」なのです。パウロはローマ六章で、この問題をはつきりと取り上げています。彼は次のように言います。「では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであろうか。断じてそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておられるだろうか。……キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。……（つまり）わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。……もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる。……だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねてその情欲に従わせることをせず、……むしろ、死人の中から生かされた者として、自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい」。人は善き業をして救われるのでなく、信じて救われた人が善き業をする、いや、せずにはおられないのです。つまり、ここには、はつきりとした筋道があります。そこで更に、この善き業をめぐる原則（筋道）をルターから学んでいきましょう。

第一、信仰こそが、実は最高の善き業であるということ。「彼らは言った、『神のわざを行

うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか。イエスは彼らに答えて言われた、『神がつかわされた者を信じるのが、神のわざである』（ヨハネ六章二八―二九）。

第二、このような信仰から、その果実として豊かな泉のごとく次々と善き業が生じてくるということ。「信仰によって聖霊が与えられるときに、心はよい行いをするように動かされる」（『アウグスブルク信仰告白』第二〇条）。つまり、ぶどうの木であるキリストに、信仰によってしっかりとつながっているならば、「その人は実を豊かに結ぶようになる」（ヨハネ一章五）のです。

第三、善い行いの基準、それは神の戒め、つまり十戒であるということ。人の目から見て印象がよいとか、仕事量が多いとかが問題ではありません。ある若者が「永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」と尋ねた時、キリストは十戒以外のものをお示しになりませんでした（マタイ一九章一六以下）。

第四、善い行いは、神への確固たる信仰の中でなされるべきこと。疑いながらの行為は何にもなりません。ルターはこう言っています。「自分の心が神の御心になつていないとの確信をもっているならば、ワラの茎一本を持ち上げるといったとるに足りないことであつても、その行いは善いものである」。

第五、善い行いの目的は、神を讚美するところにあり、したがって結果として、善い行いは神への讚美に終わるといふこと。つまり、善き業は、信仰に始まり信仰に終わるのです。

一九、信仰とこの世における責任

——社会倫理と二王国論

聖書の説くこの世の終末、キリストの再臨は、核戦争を起こすことによつて実現するといふように信じている人たちがいるなどと聞かされると、驚いてしまいますが、信仰をもつことが、実際の生活にどのようなに関わるかという問題は決して容易なことではないし、また信仰者が皆同じように考えているわけでもありません。

自分たちは天国の民であるから、この世のことには関わらない、という立場をとる人もあります。この世に生きているのだから、自分たちなりの社会を造つてその中で生きるようにしたいと考える人もいます。信仰に従つて世界を治めていくように努力しようと試みた人もあります。

宗教改革の時代にルターは、この世のあり方が直接教会の支配のもとにあるべきではないと考えました。しかし、この世は神の力のもとにあります。したがつて、信仰をもつ者もそ

うでない者も、神の正義を基にして共通の理想を求めていかななくてはならないし、そうすることができると考えたのです。信仰がなければ、いつもそれが自分中心になっていく恐れがあります。ですから、信仰者はその事を注意して、神の求めておられる義から判断を下し、正していくことが必要になります。

神の支配が教会を通して、またこの世の正義の執行者を通して行われるということを、神の二様の支配、あるいは二王国論というような表現で言うことがあります。ところが、二つの関係が正しく受け取られなかった場合があります。教会が直接的にこの世での権力を行使していこうとした中世の在り方に対して、ルターは、政府もまた神に仕えるものとしての使命を持っているとしました。しかし、政治が自らも神の義に仕えるものであることを忘れて、政治を行う人々の、あるいは特定の国の利益を求めただけになり、独立した権威を持つように考えられると、政治は直接的な権力をもっているだけに、人の罪を最も拡大した形で現わすようなことになりかねません。教会が伝える福音は人々の信仰によって受け取られますし、この世を治めることは神の正義、律法を基として、人の理性によって判断されます。神を信じる信仰によって支えられ、目覚まされた理性が愛によって働いていくことが求められるのです。

それは単に、政治的な問題との関わりにおいてだけでなく、人生のさまざまな側面に関わりを持っています。聖書の中で人の實際生活にふれる問題が多くでてくるのは、いわゆる知恵文学においてであると言えるでしょう。新共同訳聖書の旧約続編の中に入れてあるシラの書には、医者や薬の問題が取り上げられています。病気になった時には、神に祈れ、そして罪から心を清めよ、と勧めています。けれども、それだけでなく、その上で医者にも助けを求めよと言います。神が医者をつくり、その知識を授けられたからです。医者も神に祈り求めているのです。しかも、今日では医者仕事の領域が広がって、人の生死の微妙な点にまで関わるようになってきました。医者問題だけでなく、よかれと思つてすることが、とんでもない危険をもたらす場合もあります。自分たちの眼に見える範囲では、公害についてやかましく言つても、その原因を遠い外国にもつて行けば事がすむというわけではありません。宇宙船地球号全体が今問題なのです。地を従わせ、治めよとお命じになった神は、人間が自分の勝手ではなく、全被造物が「はなはだ良し」と言われる状態に保たれるように、人に委任されたのです。

この世界は全くの悪であり、汚れたもので、早くそれを去つて神のもとに行き、あるいはこの世界を終わらせて神の支配が行われるように、と考えるのではなくて、被造物を愛しそ

の保全を委ねられた神の委託に応えるように、また人間が自分たちの平和な交わりを世界規模で考えていくためにも、私たちは何が神の求めであるかを問い続け、信仰が理性を働かせ、愛が正義を促して、他者のために仕えていくようにしなくてはなりません。

二〇、神のつくられたこの世の完成へ

——終末

ルターはエラスムスとの論争の中で、創世記一章三一のみ言葉、「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」について次のように述べています。「この言葉は、神が造られた世界について言われているのであって、人間の作った世界については「神が造られた世界は、神にとつてはなはだ良かったが、人ではない」と。つまり、ルターは「神が造られた世界は、神にとつてはなはだ良かったが、人間の作りだした世界は、いまだ神の祝福の言葉を聞くことはできない」と言っているのです。その事は現代でも変わりがありません。

私たちが周りを見回すとき、かつて神が創造に際して語られたような、あの明るい、希望に満ちた肯定の言葉を語ることはできません。むしろ、希望はさらに細くなり、不安のほうが多いのです。それが私たちの人生というものに対する根本的な感情ではないでしょうか。

病気や死に対する不安、未来に対する不安、技術やその生み出す社会への不安、発ガン性

食料、公害、地震への不安、そして平気で自転車や傘が盗まれていくことに象徴される、人間自身の尊厳や良心への不安。しかも、それらの不安の正体を今一つはつきりとつかめない。そのような中に置かれているからこそ、私たちはもう一度、聖書に示された終末についての教えに耳を傾けねばならないのです。

終末—終わりの時。それは聖書において、時間的に三とおりの仕方では捕えられてきました。「今イエスと共にあり」、「近い将来にあり」、「彼岸的にある」。信仰者は皆そのどこかに強調点を置いて生きてきました。あるいはまた空間的に、私たちの「中にあり」、私たちの「前方にあり」、私たちの「上にある」といった形で理解され、歴史の流れの中でさまざまに強調点が移されてきました。どれが正しいとか、どれが間違っているとは言えません。ヨハネによる福音書では、現在の終末観が示され、ルカによる福音書では未来的終末観が語られます。聖書は確かに一つではありません。さまざまに捕え方をしています。しかし、大切なことは、終末についての内容の理解と、その終末理解から生じて来る私たちの生きざまの革新にあるのです。

パウロはこの終わりの時がすぐ近くに迫っているとこの観点から、結婚していない者はわざわざ結婚する必要はないと述べていますが、このような切迫した終末観を現代人は失ってし

まっています。と、同時に、多くの根本的な不安がわれわれの中に入り込んで来ています。このことをどのように説明したらよいのでしょうか。

聖書は終末を単なる世界の終わりだけではなく、神がイエス・キリストを通して、そのみを歴史の中に、そして歴史を貫いて打ちたてられるのだということを教えています。そのことは、終末を願って、この世から逃れたり、この世を軽視するということではありません。事実、ルターはこう語ったと伝えられています。「たとえ明日が世界の終わりの日であっても、私は今日、リンゴの木を植える」。つまり聖書が語る終末とは、この私たちの住む世界が完成するということ、神が全てをご覧になって「良し」とされたあの世界への転換だということなのです。つまり、何かこの世とは違った別の世界が来るのでもなければ、単なる人間の心のありかたや、転換を勧めているのでもありません。新しい世界、それは、この世のただ中にあり、この世との連続の中にあり、しかもこの世と同じものでもありません。しかも、この世に基礎が置かれているのです。終末の教えとは、イエス・キリストによって罪赦された者が、神の共働者として世界の完成に労するようにと、新しい創造に招かれていることに他なりません。歴史を支配し、世界の秩序を維持されるのは神です。そのことを忘れるとき、歴史は真の意味で目的を失い、いずれは人間の作りだしたさまざまな価値観の中

にうずめられ、不安の中に自己を喪失してしまおうでしょう。

やがて来られるイエス・キリストは、すでに今、み言葉とサクラメントにおいて来ておられ、礼拝を通して私たちの罪を赦し、生きるべき新しい世界を示し、その世界の創造へと私たちをも召しだしておられます。ルターはキリストをまず救い主として理解しました。決して審判者として理解したわけではありません。私たちは終末の教えの中で、最後の審判のみについて論じるのではなく、救われた者として今何をなすべきか、自分自身の生きざまを問題とし、問うのです。

付・日本のルーテル教会の百年の歩み

アメリカのルーテル教会は、ドイツや北欧からの移民によって始まりました。ヴァージニア地方のルーテル教会もそのひとつです。ヨーロッパからの船賃を借金に背負って、ドイツのライン沿岸地方からそこに渡ってきて開拓にあたった人々が、一五〇年を経てようやく根を下ろしました。そして、自分たちのルーテル教会を形成し、教会数一四五、牧師七四人、会員一万七千人、つまり今の日本福音ルーテル教会程度の教会になった一八八八年（明治二一年）に海外伝道を始めるとを決議し、伝道地を日本と定めたのが、日本のルーテル教会の始まりとなりました。一八九二年（明治二五年）には、独身の青年宣教師二人が相次いで来日しています。調査ののち、翌年のイースターの四月三日に、ルーテル教会として日本で最初の礼拝が佐賀で行われました。この働きは五年を過ぎると、熊本、久留米、博多にも展開されます。一九〇〇年にはフィンランドからの宣教師たちも加わりました。やがて一九〇

九年（明治四二年）には熊本に「路帖神学校」が開かれ、一九一一年には九州学院が創立されました。

次第に邦人牧師も増えてき、組織の整ってきた一九一六年（大正五年）には「日本福音ルーテル教会」と名乗り始め、三年後には教会憲法規則を制定して、土着の教会としての歩みを進めます。伝道の戦線も東京、名古屋、大阪の各地に広げられ、神学校は専門学校として認可され、熊本には「慈愛園」が教会の福祉施設としてスタートします。神学校の東京移転など、いつそうの発展を見せようというときに、時代の逆風が吹いてきたのでした。

一九四一年、時の政府の圧力もあつて、日本のプロテスタントが合同することとなり、教会連盟的な合同としての日本基督教団に、ルーテル教会は第五部として参加しました。しかし、この体制は間もなくなくなり、部制が廃されて、敗戦を迎えました。戦後、一旦は連盟的な部制に戻ったうえ、神学的、教理的な話し合いを深めて教会合同の歩みをやり直そうという私たちの願いが容れられなかつたために、折衝の末、一九四七年に臨時総会を開いて、教団離脱を決議し、日本福音ルーテル教会として、再出発したのです。この間の経緯の反省と責任の意識が、百年を迎える私たちの教会にとって欠くことのできないものであることを深く思わずにはおれません。

戦後、特に中国大陸での伝道が不可能になってからは、いくつものルーテル教会やその伝道団体が日本での伝道を始めました。そのうちには初めから、日本福音ルーテル教会とともに伝道したものの、のちに日本福音ルーテル教会と合同したものもあります。独自の教団を組織して今日に至っているものもあります。こういう姉妹教会との交わりや協力も大切なことですし、さらに国際化の時代に、世界に広がるルーテル諸教会との交流もこれからの恵みと課題のひとつです。この交わりはルーテル世界連盟をとおして具体化していますが、欧米の諸教会とだけでなく、むしろ積極的にアジア、アフリカの諸教会との交流や貢献を考えていくべきでしょう。

ルーテル教会の伝道開始から百年、導いてくださった神への深い感謝と、それにもかかわらずたどたどしい、誤りの多い人間の歩みへの反省の思いのなかで、この百年を振り返り、さらに次の百年に向かっての展望を、主にある希望のうちに確かなものとしたいものです。

あとがき

一九八九年の一年間、日本ルーテル神学大学ルーター研究所は、日本福音ルーテル教会機関紙「るうてる」の編集委員会から依頼されて、「るうてる」紙上に「ルーテル教会 その教えの特長」というコラムを、所員四人の分担執筆で一二回にわたり連載しました。一九八五年一〇月に開所したルーター研究所が五周年を迎えるに当たり、感謝の会を計画しましたが、そのおりの記念出版にと、この連載を一冊にまとめてみることにしました。所員で相談のうえ、各項とも連載したものに書き加えて約二倍にし、さらに約一〇項目を加えて、このような新書判の小冊ができました。信徒のための教理学習の一助にでもなれば幸いです。所員の執筆の分担はいちいち記しませんが、次のとおりです。

- | | | | | | | |
|---|----|-----|-----|-----|---|------|
| 一 | 二* | 一〇* | 一一* | 一四* | 付 | 徳善義和 |
| 三 | 六* | 一二 | 一七* | 一九* | | 石居正己 |

四*	五	八*	一六	二〇*	三浦 謙
七	九*	一三	一五*	一八*	江口再起

(*は「るうてる」に連載した項目)

今回の出版に当たつても聖文舎編集部のお世話になりました。ルター研究所の開所以来、年刊の『ルター研究』の出版に、使命を感じて、ひとかたならぬ協力をいただいていることも合わせ、心から感謝申し上げます。

一九九〇年八月

ルター研究所所長 徳善義和

執筆者

徳善義和(とくぜん よしかず)日本ルーテル神学大学教授, 同
ルター研究所所長, 日本ルター学会委員

石居正己(いしい まさみ)日本ルーテル神学大学教授, 日本福
音ルーテル蒲田教会牧師, 日本ルター学会委員

三浦 謙(みうら けん)日本福音ルーテル八王子教会牧師,
日本ルーテル神学大学講師

江口再起(えぐち さいき)日本福音ルーテル藤ヶ丘教会牧
師, 日本ルーテル神学大学講師

ルターの信仰に生きる

1990年10月5日発行

定価700円
(本体680円)

編集者 日本ルーテル神学大学ルター研究所

181 三鷹市大沢3-10-20 (編集責任・徳善義和)

発行者 大高弘達

発行所 聖文舎 162 東京都新宿区新小川町6-29

印刷・製本/精文堂印刷

ISBN4-7921-5119-8 C0216 (日キ販)

ルター研究・第1巻《一九八五年》A5上製 二四八頁 三〇九〇円

筆者 岸千年 冨本健輔 三浦謙 江口再起 梅田与四男 徳善義和 百瀬文晃 倉松功

竹原創一 石居正己 北森嘉蔵（掲載順）

ルター研究・第2巻《一九八六年》岸先生米寿 北森先生古稀献呈 二八四頁 四二二〇円

赤星進 印具徹 金子晴勇 渡辺守道 倉松功 江藤直純 今井晋 石居正己 竹原創一

江口再起 徳善義和 三浦謙 古屋安雄 相沢源七 ベンクト・ヘグルンド

ルター研究・第3巻《一九八七年》一三六頁 二五七五円

徳善義和 江口再起 石居正己 三浦謙 寺園喜基

ルター研究・第4巻《一九八八年》二二八頁 四二二〇円

アルブレヒト・ペーターズ 徳善義和 江口再起 三浦謙 石居正己 竹原創一 鈴木浩

ルター研究・第五巻《一九八九—一九〇年》近刊

*

ルター・歴史と現代の中で《ルター誕生五〇〇年記念論文集》日本ルター学会編 二八八四円

印具徹 金子晴勇 今井晋 岸千年 倉松功 塩谷饒 北森嘉蔵 徳善義和

ルターによる日々のみことば 鍋谷堯爾編訳 全書上製 四一六頁 二〇六〇円

宗教改革とルターの生涯（ルター誕生五〇〇年記念出版・限定豪華本）菊倍判 二三二頁

ペーター・マンズ著 徳善義和訳 ヘルムート・ローゼ撮影 定価一八五四〇円

一九八三年に、版元の西ドイツをはじめ、各国で同じ形で発行された記念版。特にカラーの九六ページは、カラーインキと印刷技術で定評のある西ドイツで印刷。船積みして日本まで運び、日本訳の本文と組み合わせ製本した大型限定出版。著者が、カトリック教会の未発表資料を用いて「信仰の父」としてのルター像を書きあげたものだけに、文章と写真と絵画により、新たなルター像が浮き彫りにされた意義深い書。自室や客間に一冊置くことによつて、雰囲気が変わるといっても過言ではない貴重本。

●ルター著作集 第一集全12巻（既刊10冊）第二集（聖書講義）全12巻（既刊3冊）

第二集・第10巻『第一コリント15章、ヘブル講解』A5上製 四三二頁 七二一〇円

第二集・第11・12巻『ガラテヤ大講解』上・下 A5上製 各約五〇〇頁 各七二一〇円

ルーテル教会信条集（一致信条書） 委員会編訳 A5上製 一二二六頁 二六七八〇円

内容 使徒信条 ニケア信条 アタナシウス信条 アウグスブルク信仰告白 アウグスブルク信仰告白弁証 シュマルカルデン条項 小教理問答 大教理問答 和協信条（本邦初訳）

付・証言集 訳注 解説 参考文献 索引

改革者マルティン・ルター 岸千年著 B 6 上製 一八四頁 八七六円

ルター、ミュンツァー、カールシュタット 倉松功著 B 6 上製 二一六頁 二〇六〇円

ドイツ宗教改革——精神と歴史 渡辺茂著 A 5 上製 三七〇頁 三五七五円

牧会者ルター 石田順朗著 A 5 上製 二四八頁 三八一一円

●ルター選集（既刊四点）

ルターの祈り 石居正己編訳 B 6 上製 一二二頁 一〇三〇円

ルターの説教 岸千年編訳 B 6 上製 一九〇頁 一四四二円

ルターの説教② 岸千年編訳 B 6 上製 一六〇頁 一五四五円

ルターのことば 宝珠山幸郎編訳 B 6 上製 一二二頁 一〇〇九円

●聖文舎文庫（既刊一八点）

マカリオス——至福 徳善義和説教集 A 6 判 一二二頁 六五〇円

神の国の祝宴 森優説教集 A 6 判 九六頁 六五〇円

死を子どもにどう語るか ドッド著 大川きね訳 A 6 判 六四頁 五二〇円

聖書学 佐藤陽二著 A 6 判 八〇頁 六〇〇円

*重版のさい定価が変更になることがあります。

定価 700円 (本体680円)

ISBN4-7921-5119-8 C0216 P700E (日キ販)

